

## 【いいつくろう】

山田くんの家には、下男がいます。

当時ぼくの村では、ふつうの家には下男か女中がいたものです。

ふつうの家とは、ぼくの家みたいに極貧ではないということです。

もちろんいまはいないし、下男とか女中なんて言葉は差別語になっているのでしょうが、当時の主人は下男や女中を差別したりしないで、家族以上にとても優しく大切に扱ったものです。

だから下男や女中も、大好きな主人のために、長く奉公していったのです。

さて山田くんの家の下男は、【いいつくろう】(井伊作郎)という名の、気味のわるいおやじで、懐爺によると、【いいつくろう】はおばけなんだということです。

それでもあれこれ噂をきくと、たいへんに主人思いの下男で、主人のためならば、「たとえ火のなか水のなか」という人だったようです。

山田くんの父親は、村でも有名な法螺(ほら)吹き。

その主人の大法螺をいつも、いいつくろってくれるのが、下男の【いいつくろう】なのです。

ここからは山田くんの話。

ある台風の翌朝、山田くんの父親が村びとたちに告げています。

「すげえ風のせいで、おれんちの井戸が、隣の家に飛ばされてしまうたよ」

村びとたちが、

「莫迦いえ、法螺吹き。井戸が飛ばされるわけがあるめえ」

と罵倒(ばとう)するのを、【いいつくろう】が口をはさんで、

「わたしのご主人は、莫迦でも法螺吹きでもありません。じっさい、隣の家の垣根が、うちの家の井戸の脇まで飛ばされてきましたから、井戸が隣の家に飛ばされたのと同じことです」

村びとたちは納得したが、よせばいいのに山田くんの父親は、

「すげえ雨のせいで、おれんちが中川まで流されてしまうた」

「莫迦いえ、法螺吹き。おまえんちは、ちゃんとそこにあるでねえか」

しかたなく【いいつくろう】が口をはさんで、

「わたしのご主人は、莫迦でも法螺吹きでもありません。じっさい、中川が氾濫して、うちの家まで水が押し寄せましたから、うちの家が中川まで流されたのと同じことです」

村びとたちは納得したが、よせばいいのにまた山田くんの父親は、

「すげえ雷のせいで、この下男が雷神さまに喰われてしまうた」

「莫迦いえ、ほら吹き。おまえの下男は、そこに元気でおるじゃろが」

しかたなく【いいつくろう】は、もう口でいいつくろっても駄目だと覺り、からだでいいつくろうことにしようと、

「わたしのご主人は、莫迦でも法螺吹きでもありません。わたしは雷神さまに喰われてしまいました。ごぞんじのように、雷神さまに喰われた人間は、雷神さまに変貌してしまうのです」

そして雷神さまの姿に変貌すると、村びとたちは腰をぬかしながらも納得し、それからはもうだれも山田くんの父親を、莫迦だの法螺吹きだのと決していわなくなりました。